

原発性両側副睾丸平滑筋腫の1例

帝京大学医学部泌尿器科学教室（主任：和久正良教授）

秦 亮輔, 飯泉 達夫, 矢崎 恒忠, 和久 正良

A CASE OF PRIMARY BILATERAL EPIDIDYMAL LEIOMYOMA

Ryosuke HATA, Tatsuo IIZUMI, Tsunetada YAZAKI
and Masayoshi WAKU

From the Department of Urology, Teikyo University School of Medicine

Primary epididymal tumors are relatively rare entity. Leiomyoma is the second most common benign epididymal tumor. Recently, we experienced a case of primary bilateral epididymal leiomyoma. A 50-year-old man presented with painless masses in both epididymal tails several years in duration. Solid tumors of both epididymal tails with undetermined characteristics were diagnosed. At surgery both masses were solid and smooth and were found to be well-demarcated. They were removed without difficulty. Pathology was bilateral epididymal leiomyoma. We also reviewed 55 cases of epididymal leiomyoma in the Japanese literature.

(Acta Urol. Jpn. 35: 1247-1249, 1989)

Key words: Epididymal tumor, Leiomyoma

緒 言

原発性副睾丸腫瘍は比較的稀な疾患である。われわれは最近、両側副睾丸に発生した原発性平滑筋腫の1例を経験したので若干の文献の考察を加えて報告する。

症 例

患者：50歳，男性

主訴 両側副睾丸腫瘍

既往歴：特記すべきことなし

現病歴：数年前より両側副睾丸下部に硬結を触れるようになった。右側径約 5 mm，左側径約 10 mm 程に腫大したがそれ以上の増大傾向はなかった。しかし心配になり1987年6月1日当科を受診した。両側副睾丸腫瘍と診断され手術を目的として入院した。

入院時現症：触診にて右副睾丸尾部に径約 5 mm，左副睾丸尾部に径約 10 mm の表面平滑で無痛性の腫瘍を触知した。血液諸検査および尿検査等にて，GOT および GPT の軽度の上昇以外には異常所見は認められなかった。

手術所見 6月19日手術を行った。両側腫瘍は副睾丸尾部に存在していて，周囲との癒着は認められず，腫瘍のみを摘出した（Fig. 1）。

病理学的所見：摘出腫瘍は右側径 7 mm，左側径 10

mm であり，いずれも表面平滑で，断面では均一性で淡黄白色を呈していた（Fig. 2）。組織学的には紡錘形の平滑筋細胞が束状，渦巻状に増生していた（Fig. 3, 4）。以上より両側副睾丸の平滑筋腫と診断された。

考 察

原発性副睾丸腫瘍は比較的稀なものであり，大部分が良性腫瘍である。本邦における原発性副睾丸腫瘍については山下ら¹⁾が233例を集計して検討している。233例の副睾丸腫瘍のうち良性が185例（79.3%）で悪性に比し多い。良性腫瘍のうち最も多いものはadenomatoid tumor で良性腫瘍中53.0%と過半数を占めている。平滑筋腫がつぎに多く56例で，良性腫瘍の30.2%を占めている。

山下らの副睾丸平滑筋腫の集計に関し，患側に不明な点があるため，川嶋ら²⁾が集計した本邦における48例の副睾丸平滑筋腫症例に1988年6月までにわれわれが検索しえた6例と自験例1例を加えた計55例について検討した（Table 1）。年齢分布は14歳から80歳と各年代にみられたが40～60歳代に多く見られた。患側に関しては左側が41.8%，右側30.9%と左側に若干多い傾向であった（Table 2）。両側性のものも25.5%と約1/4を占めていた。両側性に関しては Table 1に示した1980年以降の17例においても3例，17.6%と一般的にいわれているように他の副睾丸腫瘍と比べ両

側性のものも多く見られた³⁾。発生部位は尾部が78.1%と圧倒的に多かった (Table 3)。1980年以降の17例でも尾部が88.2%と多く、これも一般的に言われている副睾丸平滑筋腫の特徴と一致した。腫瘍の大きさは径 5~30 mm とさまざまであるが、径 10~20 mm

のことが多いようである。経過も7年と長いものもあるが1~2カ月と短いものもある。術前診断に関して以前は結核と診断されることもあったが、最近はその



Fig. 1. 両側副睾丸部に腫瘍が見られる。

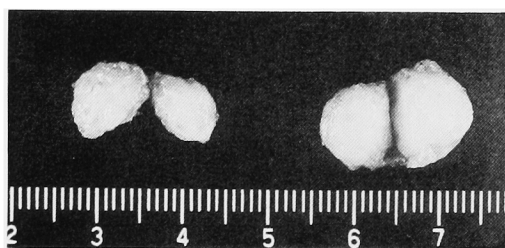


Fig. 2. 摘出腫瘍断面 (左が右側, 右が左側)。

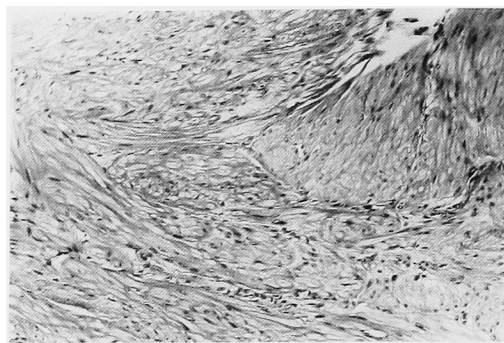


Fig. 3. 左副睾丸腫瘍の病理組織像にて平滑筋腫と診断された。

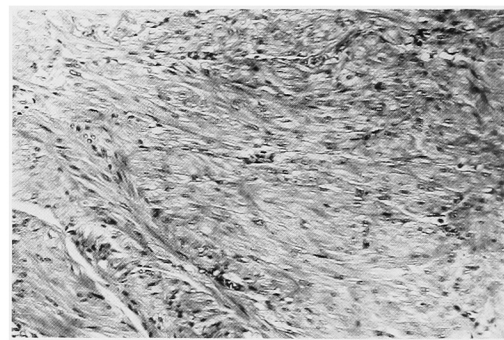


Fig. 4. 右副睾丸腫瘍の病理組織像も対側と同様の平滑筋腫であった。

Table 1. 副睾丸平滑筋腫 (1980年以降の本邦報告例, 川嶋らの集計に7例追加)

No.	報告年	報告者	年齢	患側/部位	主訴	受診までの期間	術前診断	術式	大きさ (mm)
39	1980	草場	35	右/不明	腫瘍	7年	結核	副睾丸摘除	エンドウ大
40	1981	平林ら	47	右/尾	腫瘍	1ヶ月	"	腫瘍摘除	小豆大
41	1981	杉本ら	53	左/尾	排尿終末痛	不明	"	副睾丸摘除	22×15×13
42	1982	岩佐ら	53	左/尾	腫瘍	2ヶ月	"	高位除睾術	30×30×30
43	1983	城仙ら	68	不明	腫瘍	1年	不明	不明	17×15×17
44	1983	小林	57	左/尾	腫瘍	不明	結核	副睾丸摘除	20×25×35
45	1984	平原ら	54	左/尾	頻尿	"	腫瘍	腫瘍摘除	φ10
46	1984	出羽ら	49	右/尾	腫瘍	"	"	副睾丸摘除	φ20
47	1985	庄田ら	39	右/尾	腫脹, 疼痛	4年	"	"	拇指頭大
48	1985	村山	44	右/尾	腫瘍	2ヶ月	"	腫瘍摘出	8×7×7
49	1986	川嶋ら	28	右/尾	腫瘍	6ヶ月	"	"	φ7
50	1986	三原ら	54	両/尾	腫瘍	2年	組織確認のため	腫瘍摘除	小豆大
51	1986	吉岡ら	61	左/尾	硬結	5年	腫瘍	副睾丸切除	φ15
52	1987	梶川ら	17	右/尾	腫脹, 疼痛, 発熱	不明	睾丸腫瘍	除睾術	記載なし
53	1987	山下ら	51	両/尾	腫瘍	3ヶ月	両側腫瘍	左側腫瘍摘出 右副睾丸部分切除	8×8×4
54	1988	山田ら	61	左/尾	腫瘍	不明	腫瘍	腫瘍摘出術	9×6×5
55	1988	秦ら	50	両/尾	腫瘍	数年	腫瘍	両腫瘍摘除	φ7, φ10

Table 2. 患側

右 側	17 (30.9)
左 側	23 (41.8)
両 側	14 (25.5)
不 明	1 (1.8)
計	55 (100.0)

Table 3. 腫瘍部位

頭 部	4 (7.3)
頭部・尾部	1 (1.8)
尾 部	43 (78.1)
全 体	3 (5.5)
不 明	4 (7.3)
計	55 (100.0)

ような診断は減少し, 1984年以降では結核と診断されたものはまったくみられない。最近では腫瘍または腫瘤と診断されることが多くなった。しかし術前に確定診断をすることはまず不可能である。術式としては腫瘍ないし腫瘤摘除術が最も多く, ついで副睾丸摘除術が多い術式である。ときには除睾術もある。副睾丸腫瘍の約20%が悪性であるということを考えると術前の確

定診断が不可能な本腫瘍に対しては必要と思われれば術中に迅速病理診断を行うべきであろう。

以上, 本邦における56例を検討すると副睾丸平滑筋腫の特徴は, 好発年齢は特にないが, 30~60歳代に多く, 副睾丸尾部に好発し, 約20~25%は両側に発生する。大部分は無痛性の腫瘤として患者に気付かれるが, 経過も様々で1~24カ月より7年位までである。

本論文の要旨は第456回日本泌尿器科学会東京地方会(1988年6月16日)にて発表した。

文 献

- 1) 山下朱生, 亀井義広, 藤田幸利: 原発性副睾丸腫瘍の2例. 西日泌尿 49: 1233-1235, 1987
- 2) 川嶋敏文, 岡田敬司: 副睾丸平滑筋腫の1例. 西日泌尿 49: 201-203, 1987
- 3) Nistal M and Paniagua R: Tumors of the epididymis and the spermatic cord. In: Testicular and epididymal pathology. Edited by Nistal M and Paniagua R. 1st ed, pp.338-349, Theme-Stratton, New York, 1984

(1988年7月15日受付)